

コミュニケーション活動における動機づけ研究

高知県立高知小津高等学校 教諭 籠尾 悦子

1 はじめに

文部科学省による新学習指導要領において、現行の科目構成が変更され、コミュニケーション英語基礎、コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ及び英語表現Ⅰ、Ⅱ、英語会話へと変更されることが提示された。ますます英語教育において、英語でコミュニケーションをしようとする態度の育成や、4技能の総合的、統合的な育成が求められている。また2003年に打ち出された『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』には、英語学習への動機づけの重要性が述べられている。実践的能力を育成するためには、学習者の心理的土台となる態度について考察する必要がある。このことから英語学習において、コミュニケーションを開始しようとする意思を高めるために、どのような要因が存在し、また関連し合っているかを検証することが重要な課題であると言える。

2 研究の目的

学校現場においては、生徒たちの学力の二極化が指摘されているが、二極化してきているのは、学力においてだけではないように思われる。学習への態度にも個人差が広がってきている。英語学習の動機は、試験や成績に関連した短期的な目標と異文化コミュニケーションを目的とした長期的な目標という二重の目標を持つことが指摘されてきた(八島, 2004)。英語でのコミュニケーション活動は、生徒の短期的な目標と直接結びつきにくいいため、生徒のコミュニケーション活動への意欲には、とりわけ個人差が大きいように感じられる。実際のコミュニケーション活動において、異文化接触を促すネイティブスピーカーである外国人指導助手(ALT)の存在は大きい。約11,000人のALT(Non-JET ALTを含む, 2006年)が国内で指導している現状を踏まえると、対人接触動機がいかに関係しているか、コミュニケーション意欲に関連するかを認識しておく必要がある。

したがって、このような学習環境のなかで、生徒たちはどのようにコミュニケーション活動に取り組んでいるか、コミュニケーション意欲に関連する要因について考察し、明らかにすることは、学校現場の教師にとっては、生徒指導上、重大な意味を持つ。

そこで、本研究の目的を以下の3点とする。

1. ALTと生徒の心理的要因の関連を検証する。
2. コミュニケーション意欲(WTC)、動機づけ、自信、国際的志向性について関連を検証する。
3. その他の人的資源の介入によるWTCの変化を検証する。

3 研究の内容

(1) 調査

第2言語学習の究極の目標は、コミュニケーション意欲を高めることだと言われている(Dörnyei, Z, 2001)。第2外国語習得において、言語不安が大きく影響を与えることは、すでに先行研究から明らかになっている。不安と自己の能力認知がWTCに大きく影響を与えることもすでに研究されている(MacIntyre & Charos, 1996)。文部科学省の現行の学習指導要領において高等学校の外国語の目標の一つは「英語でコミュニケーションをしようとする態度を育てる」である。したがって第1次研究では、生徒のコミュニケーション活動時の現状把握のために、対話話者によってどのように意識が異なるのかを調査した。第2次研究では、生徒がコミュニケーション活動を実際行う際の情

意要因の関連について考察を行った。最後に第3次研究では、授業実践によるコミュニケーション活動への意欲の変化について考察した。

ア 第1次研究—話す相手による意識差に関する調査—

日本の教室内で、中学校及び高等学校の段階では、英語でコミュニケーションを開始するのは、対話相手が日本人教師、生徒、外国語指導助手の三者である。したがって、本研究の第1次研究では、WTCに影響を与えている不安が対話相手によって、相違があるのかを検証した。また不安とともに、自信や他の心理的要因についても調査をした。被験者はA中学校1年生137人であった。

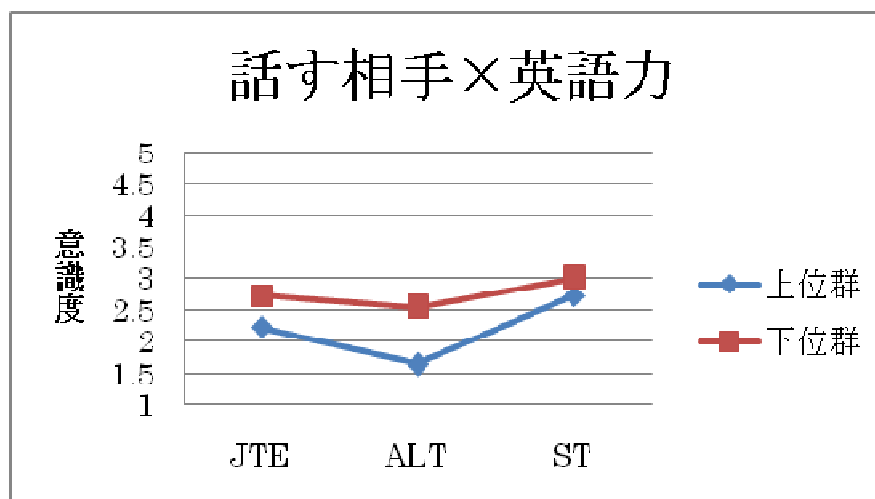


図1 話す相手による意識差に関する調査結果

ALT：外国人指導助手 JTE：日本人教員 ST：生徒

統計的に交互作用が認められない項目もあったが、全体としては不安・緊張・自信・異文化志向・自己成長のどの項目においても、上の図のような傾向がみられた。数字が小さいほど、生徒の意識の高さを示している。

イ 第2次研究—WTC研究—

(ア) WTC研究について

WTC研究は、WTC (Willingness to communicate、以下、WTCと略す) の概念は、第一言語におけるコミュニケーション研究から展開されてきた。その後、WTCに関する研究は第二言語研究にて応用されるようになり、MacIntyre, Clément, Dörnyei, & Noels (1998, p. 547) は、第二言語のWTCを“a readiness to enter into discourse at a particular time with a specific person or persons, using L2” 第二言語を用いて、特定の状況で、「他者と対話する意思」(八島, 2004)と定義し、WTCの概念モデルを提起した。このモデルは「第二言語教育の個人差研究の系譜として、カナダを中心として発達した異文化接触と態度・動機・不安・自信などの研究の延長として提示された(八島, 2004, p. 13)」ものであり、12の要因を6層からなるピラミッドで図式化したものである。

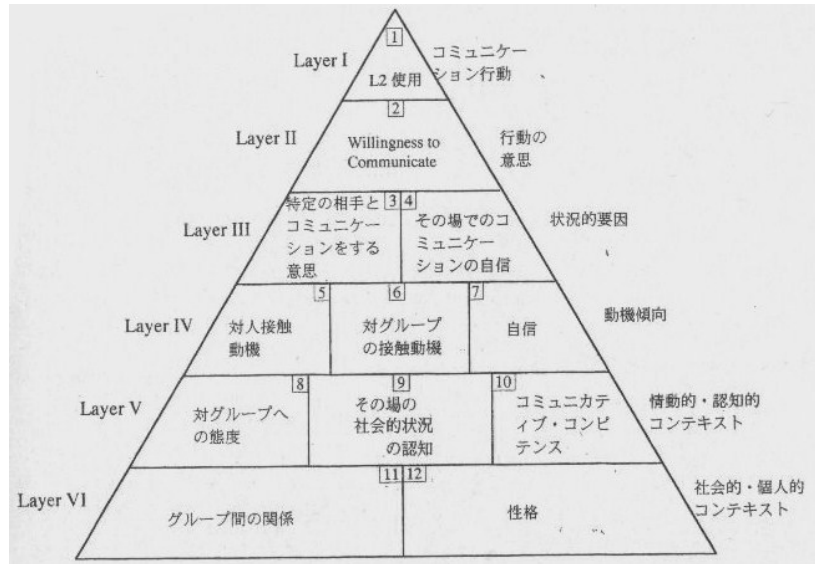


図2. WTC の概念図 (MacIntyre, Clément, Dörnyei, & Noels, 1998)
(Yashima, 2004, p.13 より引用)

上の図は、頂点の L2 使用に至る様々な下位要因を 5 つに分類し、L2 使用は、Layer VI から Layer II までの各要因が複雑に絡み合って生じることを示したものである。「外国語学習の最終目的を異グループ間のコミュニケーションと捉え、WTC、すなわち「他者と対話する意思」の涵養を第二言語学習の主要な目標の一つと考えている (八島, 2004)」ものである。

(イ) WTC スケールについて

コミュニケーション分野の研究において、WTC を如何に測定するかは非常に重要な問題である。「WTC 尺度化の可能性」(籠尾・多良・那須, 2009)では、高知県の 620 人の高校生を対象に、Sick(2000)の WTC テストを使用した調査を実施している。厳密な統計分析の結果、英語でのコミュニケーション活動への意欲は、「教室内を想定した場面」と「実際の英語使用者を想定した場面」の二つに大別される。下の図は、その調査結果による二つの要因の相関関係を示している。

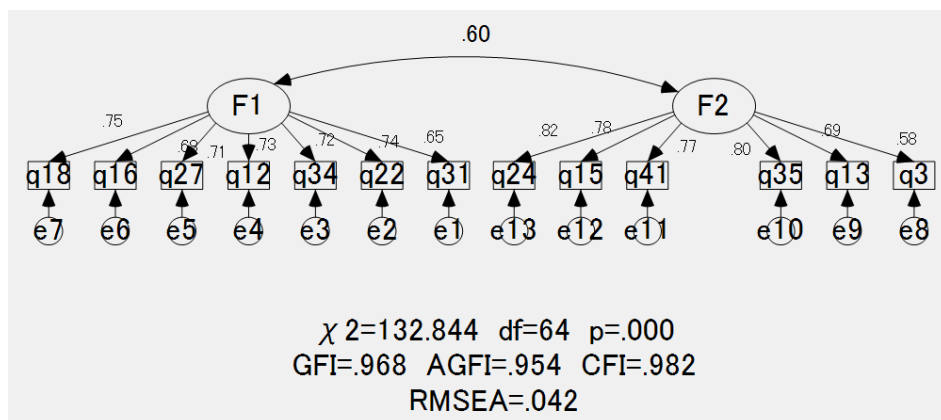


図3 2 要因の WTC の相関図

F1 : 「実際の英語使用者を想定した場面」の WTC
F2 : 「教室内を想定した場面」の WTC

(ウ) WTCと動機づけ、その他の情意要因の因果関係について

次に共分散構造分析を用い、WTCとL2コミュニケーション自信、動機づけ、国際的志向性、英語力の因果関係を検証した。日本におけるWTC研究の代表的な研究であるYashima(2002)のモデルを参考に、WTCとL2自信、動機づけ、国際的志向性、英語力について、調査を行った。WTCとL2自信、動機づけ、国際的志向性については40項目を作成し、質問紙にて回答を求めた。Yashima(2002)の略図は以下に記す。

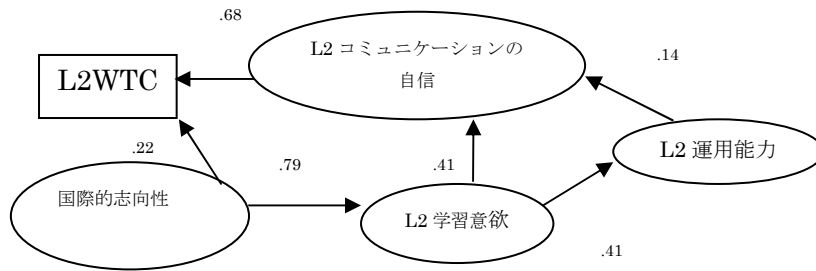


図4 Yashima(2002)の略図

本研究では、WTCをWTC1、WTC2と分けて、検証した。以下はその仮説モデル図である。

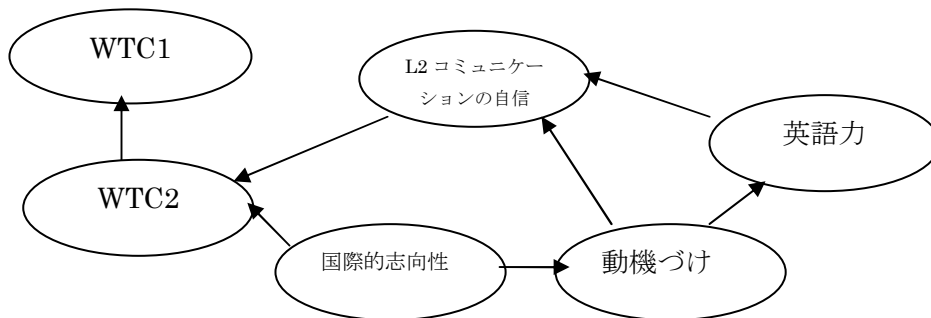


図5 WTCと動機づけ、その他の情意要因の仮説モデル図

ウ 授業介入におけるWTC変化

第1次・第2次研究で得られた知見を考慮し、授業実践におけるコミュニケーション意欲の変化を検証した。本研究では、教室内WTCを通して、教室外WTCが育っていくという第2次研究の結果をもとに、教室内に外的な介入を授業の一環として行った。生徒の教室内WTC、教室外WTCにどのような影響がでるのかを確認した。WTCには能力認知が重要な要素であるという最初の議論に基づき、生徒を上位群、下位群に分けて、細かく検証した。

(2) 調査結果

第1次研究の結果から、学習者は話す相手により意識差を感じていることが明らかになった。不安だけでなく、その他の質問項目を通して、総合的な結果として、意識差を大きく感じる対象は、ALT、JTE、生徒の順であった。教室内を想定した調査であるので、ALT、JTE、生徒の順であったが、教室外のコンテキストを想定すると、それは実際の英語使用者を想定した場面において、教室内での活動を想定した場面よりも、不安や自信を感じると思われる。第2次研究の結果、直

接、教室内の活動を想定した場面における WTC に影響を与える要因は、自信と動機づけであった。動機づけに関しては、教室内の活動を想定した場面における WTC 及び実際の英語使用者を想定した場面における WTC とともに、影響が見られた。自信に関しては、教室内のコミュニケーション意欲を通じて、実際の英語使用者を想定した場面でのコミュニケーション意欲へとつながっていることが確認できた。第 3 次研究の結果、全体的な結果からは、コミュニケーション意欲の統計上変化は、見られなかったが、生徒の自由記述では、肯定的な記述がみられた。生徒を上位群・下位群と分けて、詳細な分析をした結果、下位群において、国際的志向性の一つである接近回避傾向は大いに高まったものの、教室内を想定した場面の WTC には低下が見られた。事後の自由記述アンケートでは、英語力に不安を感じている生徒には、活動の内容が難しいと感じた生徒がいたことがわかった。上位群ではわずかではあるが、内発的動機づけ及び教室内を想定した場面の WTC が高まっていた。また外部調査によって、生徒の英語への自己能力認知が改善されたことがわかったので、補足しておきたい。授業を実施した該当校では、ベネッセコーポレーションのスタディサポートを学期の開始時に実施している。4 月に「英語が不得意である」と回答していた生徒 (35.9%) は、大きく減少し (20.6%)、「英語が得意である」と回答した生徒 (28.2%) は小幅な減少に留まり (23.5%)、引き続き「英語が得意である」と認識していた。一般的には 2 学期には学習の内容が深まり、学習が難しいと感じる生徒が増えてくるが、介入を行った該当クラスは、逆転現象を示していた。介入後授業時間数も多くなかったことを考えると、生徒たちに肯定的な結果をもたらした可能性があると思われる。

4 まとめ

(1) 考察

第 1 次研究結果により、教室内に存在する対話相手によって、生徒の意識は異なることが確認された。英語を話すときに文法や発音、語彙、意味の伝達において、ALT と話す時が最も強く意識をしており、次に日本人教師、生徒であった。しかし英語力下位群では、英語が聞き取れて自信になるのは、JTE だと答えていることから、JTE の存在や関与の必要性が示唆された。

第 2 次研究結果から、教室内の WTC に直接影響を与える要因は、自信と動機づけであることが示唆された。自信には、外国人への接近回避傾向が影響していた。外国人への接近しようという気持ちが高い生徒ほど、生徒は自信を持っており、その自信が教室内のコミュニケーション意欲へと繋がっていくことが示された。日常、生徒たちが外国人に接する機会は多くはない。おそらく英語の授業で外国人指導助手 (ALT) と話すことが多くを占めるだろう。本研究の示唆する外国人接近回避傾向から自信、教室内コミュニケーション意欲への一連のつながりは、生徒の日常生活を考慮すると妥当なものであろう。生徒は ALT と話すときに、意識差を大きく感じている第 1 次研究が実際の授業場面には重要になってくるといえる。第 2 の直接要因である動機づけに関しては、教室内を想定した場面における WTC 及び実際の英語使用者を想定した場面における WTC とともに、影響が見られた。第 2 次研究において、教室内でのコミュニケーション意欲が実際の英語使用者のいる状況でのコミュニケーション意欲へとつながっていることが確認できた点は、非常に大きい意義を持つ。教室場面の重要性を物語る結果であるといえる。様々な授業内でのコミュニケーションタスクへの意欲が実際の場面に遭遇したときの意欲に繋がる点が明らかになったことは、現場の教師にとって、日々の授業を実践する上で、教師側の意欲を高めていくことになるだろう。

外的介入によるコミュニケーション意欲の変化を検証した第 3 次研究では、WTC に変化を起こすためには、時間を要することが示唆された。英語力上位群は、英語力の高さからより正確に、英語を使おうとするため、外国人とのコミュニケーション時の不安は大きい傾向にある。しかしながら、自信を感じる傾向は、ALT が最も高いことを考慮すると、ALT を含めた英語話者との積極的

なインタラクションが効果的だと思われる。ゲストスピーカーを招いた授業実践においても、肯定的な結果が見られる。英語力下位群は不安が少ない分、ゲストスピーカーを迎えての授業などを積極的に実施し、肯定的な経験を重ねることで、コミュニケーションへの自信は高まってくるであろう。しかし、話す内容について英文を組み立てる時に大きな不安を抱えている。対人不安は少ないが、言語不安を抱えている。ALTを含めた英語話者との積極的なインタラクションとともにリーディングやライティング、リスニングの力を育成していくことが求められる。その場面において、JTEの存在が不可欠である。WTCには、「不安」と「言語能力の認知」という要因が同時に働く(MacIntyre, 1994)。また八島(2004)は、これまでの研究(MacIntyre, Clément, & Donovan, 2002)を総合し、「習熟度の高い人の場合は、『不安』の影響が大きい、習熟度の低い人は『言語能力の認知』の影響が大きい」と述べている(p. 89)。

(2) 今後の課題

本研究では、コミュニケーション活動を実施する際の生徒の意識を、対話相手に焦点をあてて検証した。そして、コミュニケーション活動において、生徒がコミュニケーションを開始しようとする際の心理的要因について、考察を行った。ゲストスピーカー・ALT・JTEとのティームティーチングにより授業介入を行ったものの、本研究は生徒の情意面に焦点をあてており、コミュニケーション活動そのものについては研究が至らなかった。しかしながら、研究の一部である籠尾・多良・那須(2009)において、生徒のWTCを測定する尺度として、二つの場面からなる13項目を提案した。得られた13項目からは生徒がどのようなコミュニケーション活動ならば、実行可能で、やりたいと思うかという意識がみられる。すでに述べたように、生徒のコミュニケーション活動への意欲は、「教室内に想定される場面」と「実際の英語使用者を想定した場面」の二つに大別される。「教室内に想定される場面」では、「クラス全員に対して2分間、自分の夏休みの思い出について話す」、「クラス全員に対して自分が見たテレビ番組について話す」、「日本人学生対象の英語スピーチコンテストに出場する。ジャッジはネイティブスピーカー」、「宿題として自分の家族のことについてエッセイを書く」、「夏休み中、宿題として英語日記をつける」、「宿題として『死刑制度について』のエッセイを書く」の6項目が挙がってきた。技能別に考えれば、話す活動については、自分の身近な事柄について意欲が高いことがわかる。書く活動については、自分の身近な事柄だけではなく、社会的な事柄についても関心があることが窺える。また一単元としての取り組みではなく、継続的な活動として、英語日誌に意欲が高い。実際に、1学期に筆者の受け持ちクラス(1年生)に投げかけて、3ヶ月間実施をしたところ、意欲的に取り組む生徒が多くみられた。1学期の授業感想からも「自分の言いたいことを、辞書を調べて書くようになり、知っている単語の量が増えた。」と記述してあった。

このように本調査で得られた項目は、授業内に取り入れることができる項目でもある。教室内を想定した場面のWTCを通じて、実際の英語使用者を想定したWTCが発展していくことが改めて本調査で確認されたことを踏まえると、教室内のコミュニケーション活動のバリエーションを増やし、教室内から教室外へとWTCの橋渡しをしていくことがますます重要であろう。

参考文献

- Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. (1994). Motivation, self-confidence, and group-cohesion in the foreign language classroom. *Language Learning*, 44, 418-448.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Dörnyei, Z. (2001). *Teaching and Researching motivation*. Harlow, UK: Pearson Education Limited.
- Dörnyei, Z. (2003). Attitudes, orientations, and motivations in language learning: Advances in theory, research, and applications. *Language Learning*, 53, Supplement 1, 3-32.
- Gardner, R.C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold.
- Gardner, R.C. & Lambert, W.E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowly, MA: Newbury House.
- 廣森友人 (2006) 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』東京：多賀出版
- 籠尾悦子・多良静也・那須恒夫 (2009) 「Willingness to Communicate 尺度化の可能性」『四国英語教育学会紀要』第 29 号, 1-14.
- 小林明子 (2006) 「第二言語教育における Willingness to Communicate に関する研究の動向」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第 55 号, 285-293.
- MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern Language Journal*, 82, 545-562.
- MacIntyre, P. D., Clément, R., & Donovan, L.A., (2002, October). Willingness to communicate in the L2 among French Immersion students. Paper presented at the Second Language Research Forum, Tronto.
- 文部科学省 (2003) 「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」Retrieved June, 30, 2008 from <http://www.mext.go.jp/english/topics/03072801.htm>
- 文部科学省 (2010) 「高等学校指導要領解説—外国語／英語」Retrieved January, 8, 2010 from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/12/28/128
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京：大修館書店
- Noels, K. A., Pelletier, L., Clément, R., & Vallerand, R. J. (2003). Why Are You Learning a Second Language? Motivational Orientations and Self-Determination theory. *Language Learning*, 53, 33-63.
- Okayama, Y., Nakanishi, T., Kuwabara, H., & Sasaki, M. (2006). Willingness to communicate as an assessment? In K. Bradford-Watts, C. Ikeguchi, & M. Swanson (Eds.) JALT2005 Conference Proceedings. Tokyo: JALT.
- Sick, J. R., & Nakasaka, J. P. (2000). A test of your willingness to communicate in English (Japanese version). Unpublished questionnaire.
- Sick, J. R. (2001, October). Willingness to communicate as an object of classroom assessment. Paper presented at the Pacific Second Language Research Forum (PacSLRF), Honolulu, Hawaii.
- 鈴木康平, 田口広明, 田口恵子. (1994) 「AET の存在が中学生に及ぼす効果—AET の導入が中学生の、外国人や英語に対する態度、学級雰囲気にも及ぼす効果—」『熊本大学教育学部紀要人文科学』, 43, 307-315.
- 上垣宗明 (2003) 「ALT が学生に与える影響について」『神戸高専研究紀要』 41, 109-112
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 55-66.
- 八島智子 (2003) 「第二言語コミュニケーションと情意要因」『外国語教育研究』第 5 号, 81-93.
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』大阪：関西大学出版部